

北海道地震津波の記録

「海が吠えた日」より

南海大震災思い出記

大谷 出口 勉

今から約半世紀前の昭和二十一年（一九四六）十二月二十一日の子の刻の終わりに近づいたころであったが、不思議なほど、鮮明に記憶していることがある。それは当時十二歳で国民学校六年生の私が尾籠な話で恐縮だが、西の中の旧富田重雄氏宅の古い土蔵の壁に向かって寒さと恐怖におののきながら放尿していたという忘れがたい記憶である。

そのころ私は、この土蔵の前の出口家（現福岡家の駐車場）に祖母と母と三人で住んでいた。私の祖母アサノの実家、西岡家は二軒隣にあり、そこには東京で戦災に遭った二十一歳の叔母菊美が、ガランとした古びた広い家に一人で寝泊りしていたので夜は一緒に泊まっていた。その時代の便所は母屋からかなり離れた所であり、恐ろしくて玄関から旧国道を隔てた土蔵に前途の行為に及ん

だ次第である。

おりしも有り明けの寒月が耿々と照り輝き、その月明かりは美しさを越え、時々迷走する稲妻が無気味さを倍加し、筆舌に尽くし難い恐怖心に駆られ、私は金縛りにあった不動明王のごとくに身じろぎ一つできずに立ちすくんでいた。

それからおよそ四時間半後の明け方、私は現在の居住地である昌寿寺山頂の麦畑に避難して来た二百名にも達する人々と焚火で暖を取りながらも、冬の夜明けの寒気にうち震えながら轟音と共に眼下に襲来した巨大な水塊に魂を奪われていた。それは普通最大と言われている二回目の津波だったと思われるが、海面が異常に膨張したかと思うと、無数の海坊主が海辺近くの家並みを蹂躪している光景はさながら阿鼻叫喚の地獄絵図のようであった。これが死者五十二名、倒壊家屋二百六十五戸、半壊家屋百六十二戸、流失家屋百九戸等甚大な被害をもたらした大惨事、Mハ・一の南海大震災により来襲した大津波であった。そして流失されたり全壊あるいは床上浸水のため住むべき家を失った人は多数この地で焚火をしながら寒い幾日を過ごしたのである。

順不同で申し訳ないが次に前途の立小便の箇所から、地震発生時及びその後の様子と昭和二十一年の牟岐町の師走の有様を記憶の糸をたぐり寄せながらまとめてみたい。